

あかだましんきょうがんばんぽ
赤玉神教丸本舗

赤玉神教丸本舗は、旧中山道
鳥居本宿の北端近く、街道が大き
く鉤手に曲がる一隅に位置して
おり、今日も名産「赤玉神教丸」
を製造・販売する大店舗です。
赤玉神教丸は、下痢・腹痛・
食傷などに効果のある妙薬で、
多賀大社の神教によって調合し
たため、その名があるといいま
す。万治元年(1658)頃の創業
と伝え、店舗販売を主に、各地
の薬屋と特約して取次販売など



も行いました。最盛期には製造職人・販売人・番頭などを合わせると80人余に達したようであり、その店頭販売の賑わいは『近江名所図絵』などにも描かれるほどでした。現存する建物は宝暦年間(1751~64)の建立と伝え、幕末の和宮降嫁や明治天皇の北国巡幸の折には小休所に当てられました。その屋敷構えは大きく、間口23m、奥行32mを測ります。堂々とした建物外観、機能的な建物構成は、江戸時代の大店舗の姿を良好に留めていると言えるでしょう。

街道に面した主屋は、外に防火用の土戸を配し、2階正面には1間幅の虫籠窓が3つ並びます。数次の増築と各所に飾る破風などが配され、複雑な屋根組みとなっています。主屋の内部は3列構成で、東列が「おおにわ」「くちのま」「なかのま」「ざしき」、中列が「おおみせ」「かみだいどこ」「ぶつま」「なんど」、西列が通り庭に面した「こみせ」「しもだいどこ」「ながし」です。東列の「おおにわ」には接客用の竈が設けられているのに対して、西列の通り庭は内向きで明確に区分されています。主屋2階は、街道に面して「おとこにかい」「にしのかい」、奥に「おんなにかい」があり、使用人の寝室などに当てられました。また、これら諸室の東側には、神棚をもつ「しんでん」や、床・棚を構えた「しんにかい」などが明治になって新たに増設されています。主屋の背後には、「ざしき」より景色を楽しむための庭園が設けられており、文庫蔵と粉挽蔵が棟を連ねています。

主屋の東は、明治11年の天皇行幸の際に新設されたものです。門を設け、式台から「げんかんのま」「なかのま」「つぎのま」へと進み、「つぎのま」の東側には1段高く「じょうだんのま」を構えた本格的な書院造りとなっています。「じょうだんのま」の奥は「さいのま」を経て別棟の湯殿へと続きます。